
紅の大地 ~ The Endless Red Earth ~

ライオンソウル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅の大地 The Endless Red Earth

【Nコード】

N5530A

【作者名】

ライオンソウル

【あらすじ】

今の時代から数千年後の世界、人間は地球で異常気象、OCMの来襲など様々な危機に瀕していた人々は、火星に移住していた、

FILE 1: プロローグ

ザッザッザッザッザッザッザッ

???男A「シット!!しつこい奴らだな!」

???女B「またきました!これで三百と二十六回目です」

???女A「全く、これだからあんたは、、だから先に全員倒しておきなさいっていったでしょ!!」

???男A「う、うるさい!お前だってさっき違うところにV2爆弾仕掛けただろ!!」

???女A「なっ、それはあんたの字が汚かったからでしょ!」

???男B「ほらほら、2人とも静かにしないと、、」

兵士「いたぞー!こつちだー!!」

???男B「ほらほらまたきましたよ?」

???女B「右に12、後方に19、前方に24です!!」

???男A「くっそー!!どけどけー!!死神様のお通りだー!!」

紅の大地 The Endless Red Earth

外世紀2019年

地球は幾度なる異常気象、人口の増加、OCM等の来襲により地球は人間が住むには厳しすぎる環境になっていた。そこで人間は月、火星、木星に移住する計画を立てる。

火星歴01年

人類が月、火星に移住し始める。

既に人口はOCMの攻撃により世界人口は1/10以下になっていたため一部の貧困層を除きほぼ全ての人間が10年足らずで月、火星、木星へと移住する。

地球を追い出される形で宇宙に出た人類であったが宇宙に出たことで収穫もあった。

火星の鉱山で発見された鉱石「スタイルクリスタル（通称SK）」によって生命属性と言う物が発見された。

この鉱物は人が触ると人体に吸収され、その人の潜在的な力を引き出す力を持っており大小様々な大きさ、色がある。

基本的に大きく純度の高い物が吸収されたときに強い力が出せるようになっており、

そのような大きく純度の高いSKは通称キングやナイト、クイーン、ビショップなどと呼ばれている。

また、基本的に人体にSKは一度しか吸収されない。

さらに人間は宇宙開発時の技術の応用により汎用型生活補助（又は戦闘用）ロボット

「ジェネラル アームズ」

が開発さ

れる。

主に「General Arms」は頭文字を取り「ガル」と呼ばれる。

人間は地球から移住して100年たった今もOCMとの戦いが続いていた

そして100年と言う節目にあるプロジェクトが始動しようとしていた、、、

〓一週間前 火星 Star Link Bridge Heavy Industries（以下スリーブハイ）特殊工作部隊支部にて〓

男A「おい、仕事が入ったぞ。工業プラントの破壊だ」

俺はアレックス アレックス・レイダー（22） 生命属性 炎
自分で言うのもなんだが超一流のランナー兼ブレイカーだ
ちなみにランナーって言うのは惑星間航海戦艦やガルを操縦するやつ
のことを言う

ブレイカーってのは上の奴らに依頼された物を壊す、または奪還を

仕事とする奴らだ、早い話が特殊部隊

で何で俺達がこんなぼろ屋にいるかというところ、オレが社長と喧嘩したからだ

本部のブラックリストに載っちまった俺達は資金面が毎月かなり寂しい

しかしミッションは軍からこつちに来てからはほぼ全ての作戦を成功させているため

実力は認められているらしく何とかだけは首は免れている

あと何故かオレはSKを取っていないのに能力が使える。

才能だろうか？だとしたら俺って天才？ イヤー流石オレ！！

女A「またそんな仕事？」

こいつはレイナ レイナ・ヒューポクライト（21）生命属性 雷
一応俺の相棒だが料理は下手くそ がざつでかなり気が強く女らしいところはゼロ、

と言いたい所だが体つきだけはモデル並み、うん、こいつはそれ位しかない

仲間の中では一番弾薬費がかさむのが難点だがある意味完璧主義で狙った物は完璧に破壊しないと気が済まないらしい

まあ、そのせいで仲間にまで雷が飛んでくるのはどうかと思うが

ああそうそう確かこいつもSKを取っていないのに力が使えるらしい。いったいどうなってるんだか。

アレックス「当たり前前だろ？ それが俺達の仕事なんだから」

仕方が無いいつも似たような仕事だ

レイナ「もっと楽な仕事無いの？」

正直、俺も疲れていた

男B「楽しんで稼げるほど世間は甘くはないですよ？」

この人ははソウメイ ソウメイ・ブレット・レイザム（31）生命属性 風

ジジイはたしか昔地球にあった日本とか言う国の人間の末裔らしい見た目はかなり細く見えるが何かの武道の心得があるらしくコンビニでいかつい奴らに囲まれたときも敵はパンチ一発出す前にみんなのされていた、、

ホント人間じゃあ無いんじゃないかと思うことがあるがこの中で一番の良識人であり物知りだ

そのおかげでそんなに老けてないのにみんな（一人をのぞく）から「ジジイ」と呼ばれている

あっそうそう、ちなみにリーダーだ

女B「そうですよ、こんな世の中なんですから。あっお茶が入りましたよ？どうぞ」

彼女はアリス アリス・トゥルース（19）生命属性 水

これほどかわいいと言う言葉が似合う人はそうはいないだろうはっ何言ってんだ俺！

かつ彼女はおそらく俺の知ってる中で一番女性らしい女性だろうまあ身近に女らしくない女がいればさらにそれが引き立つのだろうがちなみに彼女はここの支部の人間ではない。実は彼女は本部のかなりエリートの種類に入り

階級もじじいの一個上の大尉だ。

何故そんな偉い人がここににいるかというと「みなさん面白いですから」だそうだ。

本部の方の社長も友達のような関係らしいので簡単にこっちに来れた

らしい

さらに彼女はビショップレベルのSKを取ったので生命属性「水」の発展系である「氷」まで使える。

エリートの名は伊達ではないと言ったことか

レイナ「あつ、ありがとう」

レイナは同じ女性だからだろうか？やたらアリスには優しいとゆうかアリスでなくても同じ女性には優しいが男に対しては、、

レイナ「ほらジジイにアレックス、アリスがお茶入れてくれたわよ。さっさと取りなさいノロマ！」

こんな感じた

ソウメイ「はいはい、有り難うございます大尉」ニッコ

相変わらず笑顔が爽やかだ

アレックス「ありがとよ、アリス」

ソウメイ「ほらほら、大尉にはちゃんと敬語を使いなさい？ろくな大人になりませんよ？」

アレックス&レイナ「うるさい！！」

ソウメイ「おやおや、2人の息がピッタリですねえ」

アレックス&レイナ「誰がこいつorあんななんと！！」

あ

「

ソウメイ「ははは、それは夫婦漫才のつもりですか？」

レイナ「クツソージイめー」

アレックス「アリスも何か言ってくれない？」

ソウメイ「すぐ人に頼っては行けませんよ？」

アリス「ふふふ、いいですよ。それとソウメイさんもどうか私のことをアリスと呼んでください」

ソウメイ「いえ、いくら何でも悪いですよ」

アリス「じゃあ上官命令です、私を大尉ではなくアリスと呼びなさい。」

・
・
・

ソウメイ「ふつ、解りましたよ たいい」

アリス「もう、ソウメイさんったら」

俺達はまだ知らなかった・・・
このいつもと変わらないと思っていた作戦が
俺達の人生の終わりで始まりだったなんて・・・

続く

FILE 1: プロローグ (後書き)

どうも作者のライオンソウルです。

紅の大地へ The Endless Red Earthへ FILE 1 プロローグはどうでしたか？ えっ まだ一章だけじゃまだ全然分らない？ まあ確かににそうですね。これからどんどん面白くしていきたいと思いますが、まだまだつたないところがあるのでそこはもっと精進していきたいです。

それでは To Be Buuuuu (^ ^) uu
uuuuuu!!

FILE 2：1つの終わり、1つの始まり

いつもいつも似たり寄ったりの仕事

まあそれも仕方ないと思うようになってきた毎日

世界は相変わらず戦争が絶えない

だからこそ自分はこんな仕事に就けた

ある意味自分はこんな戦争に感謝しないとイケないのかもしれない、
、それにしても

アリス「、、、クス、ん、、アレック、さん？アレックスさん？作戦時間ですよ？また寝てるんですか？」

眠い、、、それに、作戦時間ってまだ5時間後だぞ？

アリス「あーれーつくすさーん？起きてこないんだったら入りますよー？」

時間に律儀なのは良いけど早すぎないか？それに今なんて、、、

アリス「じゃあ入りまー、、、、」

ちよっと待て！！今部屋には俺の秘蔵コレクション（何かはあえて言わない）

がたくさん転がって、、しかもパンツ一丁だぞ！？
いろんな意味で誤解される可能性100%じゃないか！

アレックス「!! ストップ!! ストーーーーッ!!」

ドン!

アリス「きゃあ！」

アレックス「うわっ！」

ド
シ
ー
ー
ー
ン
!!

アリス「んっ、いたた
え？」

アレックス「イッテ 大丈夫か? アリ あ ()

アリス「キャー………!!」

アレックス「うわー……！……うわー……！……」

おちつけ！
落ち着け俺！！

ヤバイ この体制はヤバイ

何がヤバイかって言うたら体制がその アリスの体に覆い被さるよ
うに俺が、、

アリス「キャー――――！！キャー――――！！」

アレックス「わーーーーー！！ギャーーーーー！！」

何とかどうとでも幸運、、
じゃなくて実にも俺の上には開けたときに降ってきた荷物の
せいで動くことが出来ない。

早くどいてあげないと変な誤解、、はもう生まれているか。
だったらもうちょっとこのまま、、

ダッダッダッダッダ

レイナ「どうしたのつつアリス！！！！
うわっっ！！なに
をしてるのっ！！あなた達！！」

アリス「助けてーーーー！！アレックスさんがーーーー！！」

レイナ「アレックス！！あなたっ！！」

アレックス「ちちちちち違っ！！誤解だ！！俺は無罪だ！！
~~~~~！！」

レイナ「言い訳、、するなーーーー！！！！」

レイナの十八番ローリングソバット！！  
アレに当たったら死  
、、

ゴシャ！！

アレックス「で、何でそんなにジジイはテカテカしてんだよ」

ソウメイ「いやー久々に良い物が見られました。」

アレックス「ホントに性格悪いよな、あんた。」

ソウメイ「でも、あの人のソバットを受けて生きていられるなんて

アブソリュート  
リヴ

の異名を持つだけのことはありますね。」

アレックス「……やめろ」

ソウメイ「えっ？」

アレックス「いや  
その話題はやめてくれないか

L

ソウメイ「、、すみません。少し軽率でしたね。」

アレックス「.....」

ソウメイ「.....」

アレックス「はあ 何で俺は30過ぎのジジイに看病されてんだか、  
、、」

ソウメイ「自分で招いたことでしょう？それともあんな騒動起こしたあとで2人が看病してくれるとでも？」

アレックス「うう 確かに、、、」

ソウメイ「それと、ひとつ忠告しておきます」

アレックス「？ なんだよ？」

ソウメイ「ちゃんと隠す物は隠して置いた方がいいですよ？」

アレックス「！！！！！！！！」

ソウメイ「よし、終わリま」

アレックス「なななななな何で！？」

ソウメイ「ははは、誰でも解りますよ。それにしてもやっぱりみんなにばれて無いと思っていたんですね？」

アレックス「みんなにつて、、まさか！？」

ソウメイ「ええ、みなさん知っていますよ」

終わった、

この瞬間自分が積み上げてきた物が音を立てて崩れ去っていくのが解る、

今までお世話になった方どうもありがとう、  
みなさん、自分は一足早く先に行って参ります、

どさっ

ソウメイ「やれやれ、気絶してしまうとは案外メンタル面で弱いみたいですね。

、、それにしてもあの蹴りを受けて脳震盪と打撲で済んだのですか。

軍人でもあんなの受けたら骨の一つや二つは折れていますよ

さすがはXナンバーと言ったところですか、

「



カッカッカッカ

アリス「あっソウメイさん。次のミッションまであと4時間になったので最終確認兼、移動しますよ?」

ソウメイ「分かりましたすぐに行きましょう」

アリス「・・・ところでアレックスさんは何処ですか?」

ソウメイ「そこでのびていますよ」

アリス「そうですか、、じゃあ起きてもらいましょうか・・・て  
やっ!」

『ソリットウォーター!』

そう言う彼女の手から出た水が弾丸のごとくアレックスに襲いかかった。

～同時刻 第4工業プラント～

????「今はまだ目の前に全人類の敵が居るのだぞ!」

????「今はそれよりも人間同士の戦いを止めなくてはなりません」

????「しかし、まだ地球には人間が地獄のような暮らしをしているんだ

彼らを助けたいと思わないのか!？」

「???」いいえ、彼等を助ける前に私たちのプロジェクトと貴方の「機体」は必要です」

「???」その「機体」は大量殺戮に使ってはいけない!! 私はいくまで対OCM用に作った物だ!!」

「???」どちらにしても同じ、戦いを終わらせるために作ったことには違いありません」

「???」同じではない!! どうしてそれが分からない!？」

「???」分かりません」

「???」くっ、もういい!      どちらにせよお前らにはあの機体を操れない」

「???」なんですって?」

「???」私がそのようにプログラムしておいた。      絶対にお前らには動かさせはせんぞ」

「???」くっ」

「???」そう言う事だ。お前らは地球人を助けることにプロジェクトを進めている!」

カッカッカッカッカッ

「???? ふん……まあ良いわ。」

ピ

「???? 私よ、予定通り4時間後に作戦を実行するわよ、

ふふ、、まだあの博士には利用価値は有るわ

まだ殺さしちゃダメよ。『大義は我らにあり』ふふふふ、

、  
、  
」

続く

### FILE3 実行 ミッションスタート

アレックス「鬱だもう生きていけない・・・」

レイナ「まだ22なんでしょ？ なにジジイみたいなことってんのよ」

アレックス「・・・」

レイナ「どうしたのよ？ 反論する元気もないの？」

ソウメイ「そこ、作戦はちゃんと聞きなさい。」

アレックス「、、、、」

アリス「もう、ちゃんと聞いてください。」

ソウメイ「仕方がないですね。では大尉、説明を続けてくれますか？」

アリス「わかりました。今回は潜入ミッションです。目標は第四プラントにあるコンテナになります。」

レイナ「はいはいはい！」

アリス「はい、なんですか？」

レイナ「そのコンテナの中は何が入ってるの？」

アリス「中身は、、カプセルのようですね。」

レイナ「それだけ?」

アリス「はい、それ以上はなにも書いてません・・・」

ソウメイ「訳ありのようですね。」

アレックス「・・・面白そうじゃん。」

レイナ「ええ、なかなか刺激的じゃない?」

アリス「では、作戦の続きです・・・・・・・・・・」

3時間後 第4プラント前の森にて

アレックス「で、何でオレが外で待機なんだよ?」

ソウメイ（通信）「今の貴方は来ても邪魔になるだけです。」

アレックス「うっ、何処に行ってもオレは厄介者が、、」

ソウメイ（通信）「まあまあそんなに悲観的にならないでくださいよ?（ニコツ）それとも誰かおいていった方がよかったですか?」

アレックス「それはやめてくれ!今の状態でレイナをおいて行かれたら何やられるか分かったもんじゃあないし。アリスは、、アリ

スにはどんな顔をすればいいかわかんねえ。」

ソウメイ（通信）「それなりに反省しているみたいですね。」

アレックス「さっき少しでも変な気持ちになってしまったのもあるからな、ははは・・・はあ。」

レイナ（通信）「ずいぶんないいようね。」

アリス（通信）「アレックスさん・・・さっき私の体でそんなこと考えていたんですか？」

アレックス「え？もしかして、、ジジイ！あんた！？」

ソウメイ（通信）「なんですか？（ニコッ）」

アレックス「通信をみんなにまわしてたな！？」

ソウメイ（通信）「ええもちろん（テカテカ）通信は普通、みんなにまわす物ですから（ニコッ）」

レイナ（通信）「何が何をされるか分からないよっ！？普通そんな事レディーに言う！？」

アリス（通信）「アレックスさんがそんな人だったなんて、、」

アレックス「わー！！違っ！！それにお前みたいなのはレディーなんていわねえ！！」

アリス（通信）「ひどいっ！！そんなこと言う人だったなんて！」

アレックス「ちちちち違う！！今のはアリスに言ったんじゃないよ・・・」

レイナ（通信）「じゃあ誰に言ったのよ!？」

アレックス「お前しかいないだろうが!!」

レイナ（通信）「なっ!？あなた、後で覚えておきなさいよ!？」

ソウメイ（通信）「みなさん少し静かにしてください。」

レイナ（通信）「止めないでよ!ジジイ!」

ソウメイ（通信）「静かにしてください!さっきから人が少なすぎるといませんか?」

レイナ（通信）「そ、そういえば確かに」

アリス（通信）「畏、でしょうか?」

ソウメイ（通信）「いえ、硝煙の臭いとこれは・・・血?」

レイナ（通信）「?なんの臭いもしないわよ?」

ソウメイ（通信）「私の能力を使わないと分からないほどの微かな臭いですから。」

アリス（通信）「硝煙ってまさか?」

アレックス「・・・ああ、どうやら先客がいたみたいだぜ？こちらでガルを5、いや6体確認した。」

ソウメイ（通信）「ではそちらは任せました。本当のところ一人で戦った方が色々楽なんでしょう？」

アレックス「・・・ああ、ただどあいつ等の様子を見ると既に本隊は潜入しているみたいだな。ハッ、つまりあいつ等も留守番か。」

ソウメイ（通信）「ええ、そちらを片づけたらこちらに来てください。」

アレックス「結局行くのかよ。まあいいか、まずは目の前の敵に集中中集中とお！」

レイナ（通信）「後で会うときはおぼ　ブチッ」

アレックス「さあ！！オレの巻き添えはだれだあ！？」

今まで静を保っていたそれが、一瞬で加速する

敵はただの無謀なガルだと思っていた。

一発、二発、アレックスはライフルを撃つ　その間にガルが3体破壊される　（2秒）

敵が応戦する。しかし、アレックスには当たらない　（4秒）



ビームナイフでガルのコクピットのみを貫く 残り2体 〽7秒〽

また敵が無駄な弾を撃つ、アレックスの炎がそれを許さない 〽9秒〽

敵がアレックスの炎に包まれる。2体のガルが跡形もなくなる 〽11秒〽

アレックス「ふう、え〜っとタイムは、〽、11秒か。ん〜惜しいな。〽〽〽なんだかんだ言ってまたオレ戦ってんだな。やっぱりオレは戦うことしかできない無能な人間なのか。」

ただ無性に、本能の赴くまま戦う それだけ

自分では制御できない感情 そのせいで仲間を

アレックス「おっと、感傷に浸りすぎたか、ダメだなオレ。 〽〽〽さて、じゃあレイナ達を助けに行くかな」

〽第四プラント内 ブロック2〽

ソウメイ「アレックスの言ったとおり先客がいたようですね」

アリス「ええ相当な数ですね」

レイナ「これくらいじゃ私は止められないわよ？」

ソウメイ「見つかってしまった以上逃げることもできない、か。」

レイナ「なかなか刺激的なシチュエーションじゃない？」

兵士「無駄口を叩いてるだけの余裕がお前等にあると思うのか？」

隊長「全員！構え！！」

・  
・  
・  
・  
・  
・

隊長「撃てーーーー！！」

・  
・  
・  
・  
・  
・

隊長「撃て！！どうした！？撃つ、、な！？」

そこにいたのは兵士ではなく、無数の氷像だけだった

アリス「すみません、ちょっとみなさんには凍っていただきました。

」

隊長「お、お前スタイリストか！？」（注）スタイリスト＝SK  
を取得した者のこと

レイナ「残念ながら、私たちみんなスタイリストなの。」

隊長（ち、畜生！3対1じゃあ勝ち目がない。ここは逃げるか！）

隊長「食らえ！！」

バンッ！バンッ！バンッ！

ソウメイ「スモークボムで私から逃げ切れるとでも？。・・・「神風」」

流れる風に乗リ煙が消えてゆく

隊長「なっ！？煙が？」

ソウメイ「プロは戦闘中も常に背後に気を付けないといけません。」

レイナ「いっただきい！」「ライティングランサー！！」

バチバチッ！！

隊長「のわぁ！ まさかお前等、」

ソウメイ「ええ。今は一人「死神」が足りませんが「紅き旋風隊」と言ったら私たちのことですよ。」

レイナ「その名前ださいからやだって言ってるじゃない。」

アリス「いいじゃないですか、わかりやすくて。」

ソウメイ「まあ気絶している人には聞こえませんか。アリス、カプセルは第何研究室ですか？」

アリス「資料によるとカプセルは第8研究室に有るようですね。」

レイナ「じゃあ第8研究室とやらにレッスゴー!!」

アリス「おゝゝ!!」

ソウメイ「やれやれ」

続く

## FILE3 実行 ミッションスタート (後書き)

懲りずにまだ公開していきたいと思います。

書いてて思うのですが、やっぱりまだまだ修行が足りませんね。

これからもまだまだ続いていくので、ながーい目で見てやってください (^^;)

## FILE 4 はじける力

「えーっと、ここは何処だ？ 確か第四プラントに入って・・・自分が何処にいるのかますますわかんなくなってきたぞ？」

超方向音痴のアレックスには地図無しで初めて来た所など歩けるはずもなかった

「さて、基地内じゃトランシーバーも通じないしここはどうするか・  
・第8研究所？ ん？そう言えばアリスがさっき第8研究所とか何とか言ってたよな。行く当てもないし入ってみるか。」

久々の休みなのに子供につきあわされて遊園地に来たお父さんの如く、いかにもけだるそうな風貌でまた歩き始める。研究所のドアに近づく前に2人居たがアレックスにとって2人程度黙らせるのは造作もないことだったので省略

アレックスはドアに手を伸ばそうと思ったが      ドアの奥からの音に気がつき

「おっと、先客がいたか。・・・何か言ってるな。      ちょっと聞いてみるか。」

と言うと、ドアの先から典型的な盗み聞きのポーズをとった

「ふふふ、さあどうしますか？ウィル。」

軍服を着た男達の前にいる琥珀の目をした女はあえて解っていることを聞く。

「それで脅しているつもりか？クライン、何度も言っている筈だ、アレを動かせる人間なんて早々いない。ましてやお前のようなただの一研究員なんかに、」

ウィルと言われた男は当たり前前の、しかし唯一の方法を結論から除外してしまっていた。

「動かせます」

「何？」

「私も「披研体」ですから。それも「ナイト」のね」  
「そう言うとかラインは僅かに男に近づく」

「バカな！？「ナイト」レベルは既に全大戦でほとんど消滅しているはずだ！？」

「ええ、本物はね。しかしそのデータから本物以上の「人工SK」が出来たと聞いたらどうしますか？」

「ありえない！ナイトレベル以上ののトレースは不可能だったはずだ！！」

ウィルは認めたくない現実から、自分でも理解している事を必死で反論していた

「いつの時代のことを言っているのかしら？ 今ならボーンレベルのSK程度なら量産できるわ。と言ってもアレの、「イヴォルヴメタル」の開発しかしていなかった貴方は全く知らないでしょうね」

注）ボーンレベル＝SKの一番小さく純度の低い種類のこと

（披研体？ トレース？ イヴォルヴメタル？ 何だそりゃ？）

アレックスは色々と考えたがそっちの方面の知識はほとんどなかったのだ

何のことが解らず、とりあえず記憶しておくだけにとどまらせておいた

「くっ、そんなたいそうな物の次は「イヴォルヴメタル」を奪いに来た、と。」

「奪いに？ 違うわ 元々アレは私たちのために開発されたような

物よ。」

クラインは近づき、さらに手には注射器が握られていた

「・・・・・・・・」

自分でも分かっていた。気づきたくなかった。

自分は彼女に、良いように利用されていたのだと。

「後は貴方の後ろのカプセルを開けて、持っているプログラムを起動すれば全ておしまい。まあ私たちと手を組むのなら命だけは助けても良いけど？」

もちろんそんな事は嘘だと解っていた。しかしそれ以上の理由が彼を突き動かす

「お前らがやるうとしていることはだいたい解る。そんなバカなことに私が手を貸すとても？」

何をしても死ぬのなら最後まで自分の信念を貫きたい。

ただのかっこつけの样だけれどそれでも死に際くらいは潔くなりた  
い。

バカだと言われても良い。どうせ今までと同じ自己満足の人生だ。

「貴方が簡単にYESと答えないとは分かっていたけど、、、、し  
うがないわね。やっぱりこの薬を使いましょうか。あなた達 博  
士を押さえてちょうだい。」

そう言うとき周りにいた男達がウィルの腕をつかんだ。

ウィルは力ではかなわない、もとい死ぬ覚悟だったので抵抗はしな  
い。

アレックス（あの男、話を聞いたところカプセルのこと何か知って  
るみたいだな。色々聞きたいことも有るし、、、、でも、ナイトクラ  
スに勝てるか？あゝ考えてても仕方ねえ！！）

ならばと言わんばかりに、手に握られた銃に力が入る。



入った瞬間・・・撃つ！！

バシユン！！

静かな部屋に響く銃声

レールガンの軌道が男に重なる

レールガンの弾が一人の男に当たる

レールガンの弾に当たった男は

アレックスだった

「ぐわっ！？」

一瞬何が起こったか解らなかった

まさか自分が撃たれるなんて思っではいなかった  
幸い当たった場所は腕、しかし出血は多い

「だれっ！？」

彼女も突然の銃声に驚く

「クライン、ネズミが一匹紛れ込んでいた。相当な数がこいつに  
やられている。」

というとドアの先からフェイスマスクを付けた銀色の髪 of 男が入り  
込んできた

「見回りご苦労様。ロクサス。こいつは、、！！」

ロクサスと言われた男は頷きもせず ただ膝をついている侵入者を  
見続けていた。

「ちつ、銃を撃つつもりがまさか撃たれるとはね。」

久しぶりに撃たれた感じを少し懐かしいと思いつつも、自分が戦いの場にいることを改めて痛感していた。

「久しぶりだな、アレックス、いやXナンバー」

「！？ オレにはそんなマスクをした知り合いはいないぜ？ それにXナンバー？ 何だよそれ？ お前・・・なにもんだ？」

初めて会ったと思われる人いきなり名前を言われ少し動揺しつつ、いつでも反撃出来るよう、撃たれていない左手に力を込めた

「顔が見えないからか？ フツ、恩人を忘れるとはお前らしい。」  
久しぶりにあつた友人の様な口調でしゃべるのがアレックスは気に入らず

「ハッ！じゃあオレを知っているのならもちろん、オレの強さも知ってるんだろう！？」

その刹那、アレックスの腕から紅蓮の炎が湧き出す

全てを燃やし尽くし 岩すら溶かすほどの炎は周りを取り囲んでいた兵士を燃やし尽くす

「猪突猛進ぶりは相変わらずか。ウィルが死んだらどうする？」

何もないはずの空間から幾数千ガロンもある水がウィル、クライン、ロクサスを包み込む

彼らが纏っている水にアレックスの炎がかき消されてしまう

「なっ！？オレの炎が水なんかにかき消されただって？」

アレックスの全力の炎がかき消される事なんて一度たりともなかったそれはSK使い、スタイリストとしての能力がロクサスと言う奴に負けていると言うことだった

「流石、アブソリュートリヴなかなかの火力だ。」

過去の呪いが込められたその名に憤怒したアレックスは

「オレを・・・オレをその名で呼ぶなあ！！」

さらに炎の力が増していく

「さすがXナンバーだな！　しかし、このシチュエーション、あのときを思い出すぞ！！　残念なことに今回はネリアはいないようだがな！！」

「！！！！！！」

その名前には聞き覚えがあった。

おそらく一生忘れることの出来ない名前だろう。

自分のせいで、自分が無力だったせいで助けられなかった大切な人

「お前ツ！！お前ツツ！！！！　お前！！！！！！！！！！」

かえられない自分の罪

忘れていたわけではない。

しかし、「コロシタノハジブンダ」

理屈では解つていても悲しさと怒りがあふれ出る

この怒りは仮面の男に対してではない、

大切な人一人守ることが出来なかった自分の無力さにたいしての怒りがあふれてくる。

彼の手に水が収束していき、アレックスとは比べ物にならない程の力が収束し

力が、水がアレックスに向けて放出されていく。激流のような水流はアレックスを吹き飛ばす

「くそっ！　けっ消せない！？　うっうわーーーー！！！！」

凡人なら一瞬で肉塊になる程の水圧が一斉に襲いかかる  
(く、くそオレじゃあ 勝てないのか？ 息が・・・ヤバイ意識が  
遠くなつて、、、、いく、、)

ドサツ・・・

「死んだの？」

今まで後ろにいたクラインが前に出てくる

「いや、気絶しているだけだ。これがXナンバーって奴か」

「ええ、でも覚醒していないみたいね、使えない。ふふ、でもまさか披研体の方から来てくれるなんてね。」

「そっちはどうなった？」

「あの人は薬を打つたらまじめに働いてくれたわ。」

「違う、カプセルの中身のことだ。」

問題は結果だ、結果に至るまでのプロセスは意味をなさない

「開いたわ。中身はやっぱりXナンバー0ね。」

「こいつが・・・」

そこにいたのは十代前半と思える幼い少女だった。

すぐに溶けてしまうような氷のような儚さや弱さ、しかし透き通るような美しさも持った少女は

カプセルから出たとたんまた眠りについてしまった

「ならオレはこいつを持って先に格納庫に行つてる。アレックスは殺すなよ。」

「さあ？どうしましょうか？」

ロクサスは返事をする前に部屋から出ていった

「戦いの時以外は感情を出せないのね、まあ私の命令にだけ従つてくれていればいいわ。」

他人を使えるか使えないかとか見ることの出来ない無能な有能は、余った時間で自分の作つた計画を何度も確認し、計画が完璧に・・・

アレックスが来たことは予想外だった。がそれを含めても順調に進んでる事に一人嘲笑していた。  
ちよつと待つて？こいつが来たと言うことは仲間もどこかにいると言うこと？

これだけの施設に一人で入り込んでくるとは考えづらい。それを含めても作戦の大きな変更はないが

「ポーン」

「プログラムが起動しました」

あれこれ考えていくうちにプログラムが起動したようだ

「さて、プログラムも起動したしも貴方は用済みね。」

彼女の手には先ほどの注射ではなくハンドガンが握られていた

「さようなら」

彼女がトリガーを引こうとした瞬間

「おいおい、まてよ。まだ俺が遊んでないぜ？」

「フツ、そう言えばアレックスと言ったかしら。　まだ貴方がいたのね。」

そこに立っていたのは先ほどの戦闘で傷ついたアレックスだった。とても立てるような傷ではないはずなのに、あつさり、当たり前のようにそこに立っていた

「そいつにもお前にも聞きたいことがあるんだけど俺の、いやこいつのために答えてくれるか？」

一歩近づく

「あら残念、彼はもう邪魔だから殺させてもらっわ。」

「じゃあお前を止めるか。愚民、あまりオレを怒らせるなよ?」

さらに一歩近づく

「死にかけの貴方が私を止められるの?」

クラインの銃に風のエネルギーが集まる

「SKエナジー、バスター・モード」

殺すなど言われたが覚醒していないXナンバーなんて使えないならゴミは早いうちに消しておいた方がいい。

「私達に報いた罰よ、消え去りなさい。」カチッ

4口径の銃から出てきたのはただの弾丸ではなく戦艦の主砲レベルの光線

そして光線は研究室を破壊していく カプセル コンピューター・

全てが消えてゆく

まずこれを受けて生きているわけがない

はずだった

「ふう、少しやりすぎたわね。私も格納庫にいきま、、!??」

彼女は感じた。いるはずのない人間の気配を

「アハハハハハ!! ナイトレベルってのはその程度か!??」

「え?」

彼女が撃った銃にはロクサスが出した水エネルギーの数倍の力を込めたはずだった。

「なっ何なのよ!? どうしてそこに!??」

しかもさっきの光線をかき消したと言うことはそれ以上の力を出したと言うことだ、なのにその力の解放を感じることが出来なかった。

普通そんな力を出した場合は簡単に感じる事が出来るはずなのだが・・・

「アレックスに死なれたら、俺が困るんでね。」

「な、何を言ってるのよ。無駄なったりはよしてちょうだい！」  
様子が何だかおかしい、さっきとはまるで別人になってしまっている。

アレックスってこいつの名前ではなかったの？

「はったりかどうかはすぐ分かるぜ？」

「っ！消えなさい！！」

続けて3発、4発、5発撃つ

しかし、全ての光線がロクサスとウィルの所だけ避けていってしま

う。  
「愚民が、絶対的な力の差が分らないのか？ 所詮ただの兵士は王には勝てないって事だ！！」

分らない。

どうしても何も感じられない。

むしろさっきの炎を出していた時の方が強い力を感じた。

今は力の存在すら感じられない。これじゃSKを取っていない人間以下だ。

それに「兵士は王には勝てない」？それではまるで

「まさか・・・？ お前が、、？ そんな！あり得ない！」

そう言う彼女は先ほどとは比べられない程の力を銃に込める。

研究所が半分吹き飛ばかもしれないがこのわけが分からない奴を早く消してしまいたい。

「今度こそ！！！！本当に死にな・・・」 ドスッ

「うるせえよ、こいつの仲間が死にまうだろ？」

「！！！！！！」

クラインの体はアレックスの姿をした何かの腕に貫かれていた

「大丈夫だ、すぐに死にやしない。死んだら話が聞けないもんなあ？」

「が、、はあ」

何とか息は出来る。質問に答えさせるためだろう。しかし、出血量が多すぎて頭が回らない。

「まず一つ目の質問。えゝつと？ああそうそう。あのロクサスという男はどうしてこんな所にいるんだ？」

まるで誰かに言われた質問を聞くようにしゃべっていく

「私の、、部下だもの。ここにいるのは当たり前でしょ、、？」

「ちつ、まあ良い。2つ目の質問。カプセルの中身は何だ？」

「・・・」

「3つ目 トレースとは？」

「・・・」

「4つ目 イヴォルヴメタルとは？」

「・・・」

「5つ目 披研体とは？」

「・・・そんな何でも言うと思った？」

「ふん、お前に聞けるのはここまでか。 最後ぐらい王の役に立てばいい物を・・・」

彼のプレッシャーが変わった。今まで何も感じられなかった筈なのにいきなり殺気がわく。

それも純粋な殺気だけ、他は相変わらず何も感じられない。

「じゃあな 愚民」

続く



## FILE5 合流

その女性はどこまでも続くかとも思える無機質な道を走っていた

カツカツカツカツカツカ

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ……」

広い

広すぎる

「もう、こんなことならアリスがジジイにしっかり聞いておくんだっただわ。」

今更の事に軽い自己嫌悪を抱いたが

（どうせ今度も聞かないんだろうな）

やっぱり反省はしていなかった

「とにかく、早く行かないと……」

不覚にも敵の陽動に引っかかってしまい、（実際は考えずに一人突っ走った結果だが）

はぐれてしまった彼女は、先ほどの大きな力の元に向かう事にした。おそらくアリスもジジイも向かうところは同じだろう

「あんな大きな力……いったいどんなサイズのSKをとったのかしら？」

当然の疑問

ルークSKをとったアリスでさえあんな力は出せない

じゃあ誰が？アレックスではないことは確かだが……

「あゝっ、もう！考えるのはヤメヤメ、行けば分かる！」

もともと考えるタイプではなかった彼女は、  
脳を働かせることより足を動かすことにした。

「ん、見えた！ あそこは・・・第八研究所！」  
そう言うとな彼女は担いでいたレールキャノンを構えた

「じゃあな、愚民」

どうする？ 考えろ、考えろ、考えろ！！  
まずこいつに勝つのは無理だ  
なら逃げる、でもどうやって？  
自分の体はこの化け物の腕に貫かれている

「しかし、せつかくだ、もっと俺の力を見てから逃げ」  
「それは、、、、楽しみね」

普通なら時間を稼ぎたいところだが  
出血の激しさからそうもいかないようだった  
（少なくともこの手を離せば逃げられるはずよ・・・）  
そんなことを考えていると、人の足跡が聞こえてくる  
やがて足跡は止まり、今度は大きな電子音が聞こえてきた

「ふん、来たか」  
「？」

アレックスの見る方向でレールキャノンの発射音とともにドアが粉砕する

「残念だがここまでのようだ。下手に俺が力を使ってあいつに死なれても 困るのな」

そう言うアレックスは糸の切れた人形のように倒れこむ  
その2〜3秒後ドアの外から突っ込んできたのは

「アレックス！！ 大丈夫！？」

レイナだった

「化け物の次は増援？ ついてないわね・・・」

「ア、アレックス・・・まさか、あなたがやったの！？」

もはやレイナは傷ついたアレックスしか見えていなかった  
たとえ、下腹部に大きな穴の開いた人間が居ようと

「あなた、私たちの仲間に何をしたの？」

「・・・」

「ねえ、答えて いや、答える」

おそらく彼女からも殺気が出ているのだろうが、  
化け物の殺気のせいで感覚が麻痺しているため、実際はわからない

「ありがとう」

「え？」

「あなたのおかげでこの化け物の手を離せたわ。」

「化け物？ふざけないで！」

「フフ、まああなたもこの化け物に殺されないようにね？」

そう言う彼女から暴風が巻き上がった

「！！ くっ待て！」

彼女が叫んだ時のはずでに消え去った後だった

「・・・もう居ないか。 そうだ！ アレックス！！」

どうやら息はしている　ただ、体の損傷が激しい

「アレックス!?　アレックス!?」

「・・・ロクサス」

「え?」

「ロクサスはどこだ?」

起きて初めに呼ばれた名前が自分ではないことに腹が立ったが

「今ここに居るのは私とアレックスだけよ」

「逃げられたか・・・うう」

「大丈夫?」

「このくらいならいつものことだろう?それよりそこにおっさんが居ないか?」

アレックスが指を指したその先には少しこげた白衣の中年が倒れて居た

「もしそいつが死んでなかったら詳しい話はそいつに聞いてくれ俺は・・・寝る」

「ちょ、ちよつとまだ寝ないでよアレ」

ス　ア

「

レイナが何か言っていたが、アレックスの耳には聞こえない  
そして、アレックスは心地よい闇に身を落としていった

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5530a/>

---

紅の大地 ~ The Endless Red Earth ~

2010年12月31日00時48分発行